



Title	英語語源研究・語源辞書について
Author(s)	中村, 幸一
Citation	明治大学教養論集, 351: 69-89
URL	http://hdl.handle.net/10291/5158
Rights	
Issue Date	2002-01-31
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

英語語源研究・語源辞書について

中 村 幸 一

序⁽¹⁾

わが国に英語語源辞典はほぼ一冊しかないといってよく、学習辞典のように互いに競合する状態にはない。その研究社『英語語源辞典』は百科事典的なものである。Onions や Klein などは一義的に「ひく」為の辞書で、事実を「知る」ことができるだけだが、この辞典はそれに加えて、読んだり、学ぶこともできる辞書であるという点で、優れていると言える。また英米の辞書ならあたりまえの事実として記載がないことも書かれているが、それが日本人にとっては利便性を高めている。たとえば、corpus の項の「両大学にこの名を持つ college がある」などの情報がそれにあたり、これは英語関係者以外にも有益であり、他の語源辞典にはあまり見られない特徴であろう。また巻末の「語源学解説」(p. 1648) に言及されているように、「語源は遡源の限界とともに不祥に終ることが多いが、語源研究は明白な、蓋然性の高い領域で停止することに甘んずることなく、推測性の加わる、その意味で危険性を伴う領域にもあえて慎重に進む姿勢と努力をもつべきではないであろうか」という基本的態度が貫かれている⁽²⁾。これは、例えばやや面白みに欠ける Kluge^{22,23} の“finden”の記述などとは対比をなす語源記述の姿勢である

finden stV. (<8.Jh.). Mhd. *vinden*, ahd. *findan*, as. *finþan*, anord. *finna*,
ae. *findan*, afr. *finda*. Keine sichere Vergleichsmöglichkeit; am ehesten

eine Nasalisierung zu ig. *pet- ‘fliegen, fallen’ (vgl. *auf etwas verfallen*), zu diesem s. unter *Feder*.

find は究極的に印欧祖語の *pent- へとさかのぼり、さまざまな対応語を挙げることができる。ほとんどすべての語派に対応語が存在する語は数えるほどしかないが (Norman Bird, *The Roots and Non-Roots of Indo-European: A Lexicostatistical Survey* の統計によると14の語派のうち、*pent- は8の語派 (すなわち Pokorny に従うとフリギア・イリュリア・アルバニア・ケルト・トカラ・ヒッタイト以外の語派) に対応語があることになっている。14のうち、過半数である8以上の語派に対応がある印欧語根は、前掲書に従って計算すると20%にも満たない。語源辞書の比較対照の手段として find を選んだのはこのように、対応語が多くかつあまり特殊な語でないという基準によるものである。以下に、この find をキーワードにして、この語と語源を同じくする印欧語の代表的な語源辞典を対比することによって、語源辞典・語源研究について考察したい。

1 “find” の記述の検討

すでに Feist の初版 (1909) のゴート語語源辞典でも Kluge^{22,23} と同じ語源を採用している。De Vries の『古ノルド語語源辞典』“finna” ではなんの断りもなくただ対応語とみなされる語を列挙しているので、これらの対応が自明のことと考えているのは明らかである：

finna st. V. ‘finden, besuchen; wahrnehmen’ (<urgerm. *finþan), nisl. fär. norw. schw. *finna*, ndä. *finde*. —got. *finþan*, ae. as. ahd. *findan*, afr. *finda*; vgl. auch ae. *fīðan* und abl. ae. *fundian*, as. *fundōn*, ahd. *funden* ‘eilen’ lat. *pons* ‘brücke’, gr. *πόντος* ‘meer’, *πάντος* ‘pfad, tritt’, ai.

pánthās ‘pfad’, *pathyā* ‘weg’, asl. *pati*, ‘weg’, apr. *pintis* ‘weg’, arm. *hun* ‘furt’....

Lehmann の『ゴート語語源辞典』でもこの説である：

*finþan ... OI *finna*, OE *findan*, OFris *finda*, On semantic development see Russ *naj-ti find* beside *it-ti go*; Lat *in-veniō find* beside *veniō come* PIE *pent-* **go, note, find**, Skt *pánthās path*, *pathyā way*, *pathyas help-ful*... Gk *πόντος sea*... zero grade *πάτος path, stride*; Lat *pons bridge*; OPruss *pintis*....

しかし前述したように、Kluge^{22,23} は非常に慎重で、一応印欧祖語の *pet- (飛ぶ・落ちる) の鼻音化 Nasalierung がまず思いつくと書いてはいるが、結論はあくまでも “Keine sichere Vergleichsmöglichkeit” であり、ゲルマン語の語源辞典の中で、この語 (の対応語) に関して、明示的に「対応が明確でない」という言及があるのは Kluge^{22,23} だけである。

また Pokorny ではこの二種類の語根 *pet- と *pent- は別の見出し語にしているので Kluge^{22,23} は *pent- 「行く・進む」が *finden* の語根であると認めたくないようである (『英語語源辞典』でも巻末の印欧語根表では別扱いにしている)。ただ Kluge も第21版以前であると、ギリシャ・ラテンその他の対応を認めている：

finden Ztw. Ahd. *findan*, asächs. *finda*, *fīthan*, ags. *finan*, engl. *find*, ...führen auf eine starke Verbalwz. germ. *fēnþ- idg. *pent-, die mit den Bed. ‘gehen, Pfad, Spur, Brücke’ in zahlreichen Abarten vorliegt.... aind. *pánthā*, aslav. *pati*, ‘Pfad’, lat. *pons* ‘Brücke’, gr. *póntos*, ‘Meer’.... Daß sich aus einem Ztw. für ‘gehen’ die Bed. ‘finden’ entwickeln kann,

bestätigen lat. *in-venire*, aslav. *na-iti* ‘finden’, vgl. erfahren, fahnden, Pfad.

従って、第22版以降、突如編集方針が変わっていることがわかる。

ところで Pokorny (**pent-*) では英語の *path* やドイツ語の *Pfad* がイラン語派からの借用であるとしている：

germ. **papa-* in ags. *paēd* ‚Pfad, Weg‘ (engl. *path*), ahd. nhd. *pfad* stammt wohl aus einer iran. Mundart, vgl. av. *paθ-*...

Kluge^{22,23} は、その可能性を否定しているのだが、Mayrhofer の『サンスクリット語源辞典』でも “aus einer iranischen Sprache wohl auch german. **papa-* in nhd. *Pfad*, engl. *path* usw” でやはりこのイラン語派からの借用説を採り、Walde-Hofmann (pons) でも同様である：

πατέω „trete”; idg. **pent-*; vgl. ags. *paēd* ‚Pfad, Weg‘ [engl. *path*], ahd. nhd. *pfad* [Lehnw. aus dem Iran., nicht zunächst aus πάτος,...]

『英語語源辞典』もおそらくこれらを参照してこの説を踏襲している。しかしこのような一般的な日常語が間を遠く隔てたイラン語派からゲルマン語への借用だというのは荒唐無稽ではないだろうか。その為か、フランスの辞書 (Chantraine, Ernout-Meillet) にはこのゲルマン語に言及したものはない。

さて、この印欧語語根 **pent-* に対して、ラテン・サンスクリットには名詞の対応語しか見出せない。そしてフランスの語源辞書 (Ernout-Meillet, Chantraine) には英語やドイツ語の *find*, *finden* などへの言及はまったくないのに対して、ドイツ・ロシアの語源辞典では (Frisk のギリシャ語語源辞典を除いて)、Walde-Hofmann のラテン語、Mayrhofer のサンスクリット、

Vasmer および Chernykh のロシア語に、それぞれゲルマン語への言及があるのが対照的である：

(pōns) idg. **pent-* „kommen, gehen” liegt noch vor in got. *finþan* „finden, erfahren”, ags. *findan*, as. *fīthan*, *findan*, ahd. *findan*, *findan*....

(pánthāh) S. auch die Verbalsippe von nhd. *finden*, *fahnden*.

(путь) Dazu stellt man auch got. *finþan* ‘finden, erfahren’, nhd. *finden*, ahd. *findōn* ‘fahnden, untersuchen’

(ПУТЬ) И.-е. корень **pent-* (: **pont-*?): **pont(h)ā-*: **pr̥t(h)ə-* — 《ступать》, 《идти》, 《дорога》 (Pokorny, I, 808). Ср. латин. *pons*, под. ... греч. *πόντος* — 《море》 (ср. *Πόντος* — 《Черное море》), также др.-в.-нем. *findōn* (совр. нем. *fahnden*) — 《выслеживать》, 《идти по следам》

なおギリシャ語ではこの語根のゼロ階梯 *pátos* 「道」に加えて、*πατέω* という動詞がおそらく同語源と考えられる（ただし Ernout-Meillet 《pons》には *pátos*、そして「おそらく」*πόντος* という記述しかない）。Chantraine (*πατέω*) では慎重に *pátos* と *πόντος* は同じ「道」でもその性質が根本的に異なっているという有益な記述がある：

pátos désigne toujours le sentier battu, fréquenté, ce qui est loin du sens originel des mots de la famille de *πόντος* Si l'on estime que ce rapprochement est peu vraisemblable, ni *pátos* ni *πόντος* n'ont d'étymologie.

したがって *πάτος* は語源不祥という説があってもかまわないのだが、Chantraine もそこまでは断定していない。これが『英語語源辞典』にも反映されているのではないかと推測される。

なお、『英語語源辞典』ではロシア語の対応語 *put'* の直後に“Sputnik”を参照せよとあって、これは親切的な記述であると判断できる。この語は元来が「道連れ、伴侶」という原義の普通名詞であるが、*с-пут-ник* と分解されて、*путь* をすでに含んでいるせいか、代表的なロシア語語源辞典 Vasmar や Chernykh にも記載がないのである。スプートニクは *OED* には載っているが、Onions にはない。Klein には詳しい説明がある。こういう場合も『英語語源辞典』であると巻末の印欧祖語語根表からさまざまな語を参照できる。今の場合で言えば、*find* と一緒に *Sputnik* も載っているという具合で、楽しめるであろう。また *find* の項には“Peripatetic”「逍遙学派」を参照せよという指示もある。こういう風に、思いもかけない語につながっているというのが、語源のないし語源研究の喜びの一つであるから、こういう「参照」という記号によって読者をエンターテインするということも重要であると思われる。ただ、しかし、なぜ「行く・進む」ことが「発見する」ことになるのかという意味変化に関しては、『英語語源辞典』に言及がない。この語源説には与しない Kluge^{22,23} にさえ説明があるし (“vgl. auf etwas verfallen”), Klein や Lehmann もロシア語 (*naj-ti, it-ti*)、ラテン語 (*in-uenio, uenio*) の類似例をあげて説得力ある説明をしている。サンスクリットにも「行き着く」→「手に入れる」といった例 (*√āp, āpnoti*) があるのでこういう意味変化のパターンの情報は、スペースとの兼合もあるが、語源記述の説得力を増すためにも付け加えるべきであったかもしれない。

2 諸特色の検討

以下に Onions や Klein などにはあまり見られない『英語語源辞典』の特

徴について述べる。

2.1 ラテン・ギリシャ語史・語学的視点

結局のところ英語の抽象語彙ないし知的な語彙はギリシャ・ラテンにさかのぼることが多いわけだが、その古典語自体の語源は Onions より詳細であり、印欧祖語推定形にまで言及していることがほとんどである。たとえば、desiccate という動詞はラテン語の過去分詞から作られたもので、語尾に-te を含むものはフランス語にもイタリア語にもない (dessécher, disseccare) (風間「ギリシャ・ラテン起源の英語」『言語』第13巻第7号 64-68)。Onions も Klein とともに L siccus 'dry' で終えているのに対して、『英語語源辞典』は英語学プロパーのレヴェルを離れてラテン語学・ギリシャ語学の領域まで踏み込んだ記述・解説をしている：

◇ラテン語の第2要素は IE **seik*^w- to flow にさかのぼり、「流れ出る」→「乾いた」の意味の変化を経たものと説明されている。

フランス語・イタリア語の語源辞典ではラテン語より古くさかのぼることはまれであるから、これはラテン語語源辞典レヴェルの記述であると言ってよい。ちなみに、Cortelazzo-Zolli (1999²) において secco は“Lat. *siccu(m)* (d'orig. indeur.) col der. *siccare* 'seccare, asciugare'”で、sete は“Lat. *siti(m)*, d'orig. indeur'”にすぎない。印欧語にふれることのやや多い Devoto (1968²) でも“lat *siccus*, da **siticus* e cioè 'assetato'; v. SETE”だが、sete では

lat. *sitis*, antichissimo tema che si ricostruisce nella forma GWHYTIS, col valore di 'sete', passato poi, in zone aride, a indicare 'consunzione', come nell'indiano *kṣiti*- e soprattutto nel gr. *phthísis*....

と印欧祖語が一応提示されている (ただし Ernout-Meillet はこれを採らない)。

さて、『英語語源辞典』braveの項には「L barbarusが『野蛮な』の意味で用いられるのは Augustus 帝以後といわれるが」とある。これもラテン語史レヴェルの記述で、もちろん Onionsにも Kleinにも見らないものである。おもしろいことにこの情報は Ernout-Meillet や Walde-Hofmann のラテン語語源辞典にもないのだ。その典拠は不明だが、実は、しかし、名詞ならすでにプラウトゥスにさえあるし、カエサルにもキケローにも出てくる。以下も、明らかに「異国人の」という意味ではない：

Quod fratres Aeduos appellatos diceret, non se tam barbarum neque tam imperitum esse rerum, ut non sciret neque bello Allobrogum proximo Aeduos Romanis auxilium tulisse neque ipsos in his contentionibus, quas Aedui secum et cum Sequanis habuissent, auxilio populi Romani usos esse. (Caesar, *B.G.* 1.44)

ハエドゥイー族が兄弟と呼ばれていたと言ったが、さきのアロブプロゲース族との戦でハエドゥイー族はローマ軍を支援したし、逆に彼らが内部の、またセークァニー族との紛争ではローマ市民の支援を得たのだ。それを知らないほど野卑ではないし、情勢に無知なわけでもない。

considerの項には「星を観察して運勢を判断する占星術に由来するらしいが・・・この種の用法は古典ラテン語にはみられないようである」とあり、これも同じようなレヴェルの記述である。ちなみに Cortelazzo-Zolli (1999²) には Vc. dotte, lat. *considerare*, letteralmente 'osservare gli astri' (comp. parasintetico di *sidus*, genit. *sideris* 'astro')...とあり、一方 Devoto (1968²) は verbo denom. da *sidus*,... che, col pref. *com-*, indica l'osservazione degli as-

tri (al fine di trovare auspici) である—従って、『英語語源辞典』はイタリアのものよりラテン語学的情報においても豊富であることが分かるであろう。

butter には「インド・イラン・北ヨーロッパでは古くから常用食品だったが、古代ギリシャ・ローマ人には知られず、Herodotus の言及が最初で、Gk *boutûron* を初めて用いたのは Hippocrates とされている」とあって、この記述は Chantraine にも Frisk にもないものである。

2.2 ロマンズ語的視点

increase の項には「現代ロマンス語ではふつう L *accrescere* からの発達形が用いられている (F *accroître*/It. *accrescere*/Sp. *acrecer*)」。これは英語そのものとは関係がない。しかし increase に類似したフランス語やイタリア語がない という事実気づいて疑問が生じた時、こういう記述は非常に親切で有益である。同様のことは *interrupt* についても言うことができる：「なお、F *interrompre*, Sp. *interrumpir* は L の不定詞に由来する」。英語の場合はラテン語の過去分詞や形容詞から動詞が作られることが多い：

Many English verbs borrowed from Latin at this time [1500–1650] end in *-ate* (*create, consolidate, eradicate*). These verbs were formed on the basis of the Latin past participle (e.g., *exterminatus*, whereas the French *exterminer* represents the Latin infinitive *exterminare*). The English practice arose from the fact that the Latin past participle was often equivalent to an adjective and it was a common thing in English to make verbs out of adjectives (*busy, dry, darken*). (Baugh (1978³: 223–4))

イタリア語の *interrompere* や *sterminare* も当然ラテン語の不定詞からである。

2.3 ゲルマン語的視点

keen の項目に見られるのがゲルマン語学的視点である：

Gmc **kōnjaz* ... は **knōw-*, **knē(w)* ... と同根と考えられる。しかし Gmc 以外には同根語は見当たらない。『鋭い』という現在の意味は英語に独特のものである。

この語がゲルマン語にしかないという前半の記述は Onions にもあるが、後半の「鋭い」という意味に関わる部分は Onions にも Klein にもないし、Kluge^{22,23} にもみられないものである。

2.4 インド・イラン語派的視点

の見られる語としては、その代表例として salt があげられるであろう。salt の項には「ちなみに Avesta や Rigveda には『塩』を表す語は用いられていないという」という興味深い記述がある。これは対応語がないという訳ではない。salt に対応するサンスクリットの salila- は RV にも見られる古い形であるが、「塩」ではなく「海」の意味であるという事実をふまえていると思われる。やや時代を下ると Atharva-Veda には「塩」という語 (lavaṇa-) が一回のみ見られる：

Lavaṇa, 'salt', is never mentioned in the Rigveda, only once in the Atharvaveda, and not after that until the latest part of the Brāhmaṇas, where it is regarded as of extremely high value. (Macdonell & Keith (1912: 230))

すなわち

ā susrāsaḥ susrāso āsatībhyo āsattarāḥ /
 séhor arasātarā lavaṇād vīklediyasīḥ // (17.76.1)

(ああ) 剥れ落ち易きものより剥れ落ちやすく、非在より非在、*sehu* より乾き、塩より崩れ易きもの。

このあたりの事情は風間教授の『ことばの生活誌』 pp. 154–158に Thieme の説などを引用して、いっそう興味深い説が展開されている。また最近 Karin Stüber, “Zu Bedeutung und Etymologie von altindischen *sāras-*, iranisch **harah-* und griechisch *ἔλαος*”, *Historische Sprachforschung* 113, 132–142 が語根は異なるのだが、*saras-*の問題を論じている。おもしろい論文だが、これを読んでも『英語語源辞典』の記述を変えることにつながるものではない。

2.5 セム語的視点

Kleinはその序文に、生立ちや人生を記しているが、ユダヤ系の宗教家なので、セム語には強いのかと考えると、寺澤芳雄教授がよく言うように実際はそうではない。非科学的な奇跡が頻出する宗教と学術的真理の追究はやはり相容れないらしく、宗教色の強い通俗語源がみられる。宗教的バイアスは Kleinにとって、アイデンティティそのものとも言えるもので、無自覚的であり、おそらく確信犯ではなからう。それを『英語語源辞典』が修正している代表例として Benjamin, Cain があげられるであろう：

上掲ヘブライ語 (= Binyāmīn) は bⁿé-yāmīn(pl.) (原義) sons(= people) of the south からの逆成による。原義を ‘son of the right hand’(=? good fortune)とするのは通俗語源(「右」が縁起がよいと考えられたことについては cf. DEXTER)。

Gen. 4.1で「私はひとりの人を得た (qānīthī)」として Cain と関係づけるのは通俗語源。Beowulf 107に Caines cynne「カインの一族」の例がある。

また、Aramaicの項には「旧約聖書の原語の一部であり、イエスも Aramaic を話していたと考えられる」と Klein にさえ見られない記述がある。

2.6 文化誌的視点

baroqueには「イタリアの画家 Federigo Barocci (1528-1612) の名にちなむとする説もあるが、この画家の様式はバロック式とは言いがたい」とある。Encyclopedia Britannicaには

Barocci also spelled BAROCCIO or BARROCIO, also called FIORI DA URBINO (b. c. 1526, Urbino, Duchy of Urbino, Papal States-d. 1612, Urbino), leading painter of the central Italian school in the last decades of the 16th century and an important precursor of the Baroque style

とあるから、「先駆者」であって、バロックではなく、マニエリスムの画家であると思われる⁽³⁾。語源的にはイタリア語かポルトガル語、さらにアラビア語に溯及する可能性があるが、Cortelazzo-Zolli (1999²)においてこの画家は言及されていない：1975年の Lurati, “Origine di barocco” (Vox Romanica 34) では、伝統的解釈であった「スコラ哲学の不自然な議論・言語」の baroco (13世紀) とポルトガル語起源のフランス語である baroque (1531年)「ゆがんだ真珠」が混淆した (incrocio) という説を退け、北部のイタリア方言「愚かな、奇妙な」であるとしている (ただ芸術用語以外の「奇妙な」の意味はフランス語から (1701年) だという)。この辞典が出たのは1999年だから『英語語源辞典』編纂中に参照はできなかったであろう。『英

語源辞典』の参照文献にあげられているのは Devoto (1968²), *Avviamento alla etimologia italiana: dizionario etimologico* だが、この辞典の *barocco* は

barocco, dal portogh. *barroco* ‘(perla) irregolare e scabra’ incr. col nome di una forma di sillogismo irregolare *baroco*, creato artificialmente dagli scolastici

とあり、これは Cortelazzo-Zolli (1999²) の退けた説である。となると、今度はこのスコラ哲学者たちの造語といわれる *baroco* というラテン語の語源が必要になりはしないだろうか。これが偶然に、ゆがんだ真珠と同音異義語であるという不自然な点も、Cortelazzo-Zolli (1999²) において、この語源説への疑問の一つとされているのである。

candle は「古代ギリシャ人の間では知られていなかったが、ローマ人や古代エトルリア人の間では早くから知られていた。アングロサクソン人のキリスト教改宗とともに OE に借入され、中世を通じて教会用語であった」とあり、これも生活誌的な、読んで面白く、言語外の知識が得られる記述である。こういう記述の姿勢は、言語を生身の人間・生活から乖離させるという悪癖ないし戦略に対するアンティテーゼとなるであろう。もういい加減に人間不在の、知的遊戯のための、歪んだ言語観は破棄すべき秋である。しかし代償はあまりに大きかったと今思っていない人は少ないだろう。

kitchen は古英語にも出てくる語であるが、「大陸時代の古い借入語。主なヨーロッパ諸語に借入されていることは、古代ローマ人の料理技術の優秀さを物語るものであろう」と言語外の情報が述べられている。*lung* には「LIGHT²『軽い』と同根語。他の内臓に較べて軽いところからか」とある。風間教授の「印欧語の『肝臓』」では「肺」についても、より広い視点から詳しい考察が行われている。こんなところにも、後述するように、関係論文のリストの必要性が感じられる。

sugar はイタリア語→フランス語を通して英語に入った語だが、非常に詳細な文化誌的記述がある：

原産地とその名称はインドと考えられる。Straboによると、アレクサンダー大帝の部下が「蜂のいない蜂蜜」(*méli melissôn mē ousôn*) のことに言及したとあるが、その名がギリシャ・ラテンの文献に現われるのは紀元1世紀のころであり、そのころはまだ薬用に用いられる舶来品であった。砂糖きびの栽培ははじめアラビア人によってイタリア(シシリー島)やスペインに導入され、十字軍戦役後ようやく、古来の蜂蜜に代わって日常の甘味料となった。Pers. を経由しているのははじめここで精製されたからであろう。

Cortelazzo-Zolli (1999²) (zucchero) ではアラビア経由のインド起源を採っていて、間に中世ラテン語を経由するかどうか という点でわずかに異なっている：

Dall'ar. *sukkar*, da un vc. ind. (pali *sakkarā*, sanscrito *śárkarā*, naturalmente lo 'zucchero di canna', essendo quello di barbabietola d'introduzione mod.), da cui dipende anche il gr. *sákcharon* e da questo il lat. *săccharu(m)*....

Wartburg (第19巻 *Orientalia* のアラビア語 *sukkar* の見出語のもとに現代フランス語の *sucre* は見出される) ではもちろんさらに詳しく説明がなされているが、『英語語源辞典』はちょうどそれを簡潔にまとめたような文化誌的記述で、簡便であるといえる。ちなみに Wartburg では

Der indische name ... sanskr. *śarkarā*, mittelind, *śakkarā*, *śakḥharā*, ist

erst im 1. jh. n. Chr. in die okzidentalen sprachen gedrungen, daher gr. *σάκχαρον*, lt. SACCHARUM (Plinius usw.)

であり、究極的にはサンスクリットか、中期インド語に溯及すると考える；一方、Mayrhofer の『サンスクリット語語源辞典』(śárkarā) では

Aus (mittel)indischer Quelle stammen zahlreiche LWW für ‚Zucker‘ wie gr. *σάκχαρ*, *σάκχαρι*, *σάκχαρον* n. (> lat. *saccharum*), *σάκχαρις* f., ... neup. *šakar* (> arab. *sukkar* > italien. *zucchero*, nhd. *Zucker* usw.)

と、ここではドイツ語の *Zucker* はアラビア語からの借入とされている。さて、われわれの『英語語源辞典』は、慎重に「Arab. *súkkar* と Gk *sákkharon* ... Pers. *shakar*, Skt *śárkarā*- の関係は明確でない」としている—これはほぼ *OED* や *Onions* の記述に沿ったものであるが、ただ

◆ME *suger*, *sug(u)re*, *sucre*, □ OF *suk(e)re* (F *sucre*) □ It. *zucchero* □ ?
ML *succarum* □ Arab. *súkkar*.

と、ML を経由したかどうかには疑問符をつけている点のみが異なっている。疑問符の有無は『英語語源小辞典』のエピソードにもあったように大変な考察の結果であることがあるので軽視すべき記号ではない。おそらくここは Wartburg と Mayrhofer そして Cortelazzo-Zolli の三者が一致しているので、これを根拠にして アラビア語で止めずにインドまで (あるいは疑問符をつけた上で) 遡らせてもいいのではないか⁽⁴⁾。

2.7 語史的語源の視点

はしがきにもあるが、もちろん Wartburg ほどではないにしても、『英語

語源辞典』には語史的語源の記述がかなりある。この点はフランスの Ernout-Meillet, Chantraine などと通ずる部分がある (Wartburg はラテン語が最終的な語源になっている場合はそれ以上溯及していないようである)。

たとえば、*army* には「OE では *here* ... であったが、ME でまず *HOST* が代わり、ついで *ARMY* がこれに代わるようになった」とあるようなのが、その例である。

hero には「OE では '*hero*' あるいは '*prince*' を表す多くの類義語が用いられ、*Beowulf* だけでも *ætheling* ... をはじめ36語を数えるという」という興味深い情報が提示されている。こういう具体的な数字までが出てくる語源辞典はまずない。

同様に数字が示されているのが *take* である。この項には、「OE ではゲルマン共通語の *niman* ... が用いられていたが、1100年ごろからこの ON 借入語がそれと並んで用いられるようになった」と語史的な記述があり、さらに、古英語から初期中期英語の *niman/tacan* の分布の問題が、論文 (Alarik Rynell, *The Rivalry of Scandinavian and Native Synonyms in Middle English*) と、その統計がともに引用されているのである。

around は「1600年以前にはまれで Shak. や AV のいづれにも用例がない」と記述されており、これは以下に言及する英訳聖書とシェイクスピアというこの辞典の柱にかかわる問題である。

2.8 各時代の英訳聖書・シェイクスピアへの言及

に関しては「はしがき」に Shakespeare の「使用語彙約3万語のうち特殊なものを除いた大部分の語」と Authorized Version の「6,568語のほとんどを収録し」とある。*astonish* の項には「ちなみに AV では *astone* は10回、*astonish* は34回用いられているが、Shak. には前者の用例はない」とあり、また引用される英訳聖書も欽定訳だけではない。たとえば *art* の項には、「ちなみに、AV, 2 *Chron.* 16.14の *Apothecaries arte* に対して Wycl. Bible や

Tyndale では *craft* を用いている」などというのがそうである。さらに *bake* には「AV では p.p. として *baken* 5 例に対し *baked* 2 例がある。Shak. では *baked* のみ」や、*because* でも「Tyndale (1526) の *because* は AV では *that* となっている (cf. *Matt* 12.10) が、*Matt* 20.31 ではこの意味の *because* が用いられている。なお、AV では *because that* は 20 数回 (*Gen.* 2.3), *for because* は *Gen.* 22.16, *Judges* 6.22 に用いられている」とかなり詳細な記述が見られる。

food の項ではゴート語訳聖書にも言及がなされる：「聖書翻訳関係で言えば、Goth. *fōdeins* は Gk *trophé* の訳で *brōma* の訳語には *mats* ... が当てられている。WS Gospels ではともに *mete*」というようにこの語源辞典は「ちなみに」とか「なお」と書いてあるその後の記述がもっともおもしろいと言ってよい。ただし、*mats* が充てられているのは *βρώμα* だけではなく、他に *φαγεῖν* (*Luke* 8.55), *ἐπισιτισμόν* (*Luke* 9.12) がある：

καὶ ἐπέστρεψεν τὸ πνεῦμα αὐτῆς, καὶ ἀνέστη παραχρήμα, καὶ διέταξεν αὐτῇ δοθῆναι φαγεῖν.

jah gawandida ahman izos, jah ustōþ suns. jah anabaud izai giban mat.

προσελθόντες δὲ οἱ δώδεκα εἶπον αὐτῷ ἀπόλυσον τὸν ὄχλον, ἵνα ἀπελθόντες εἰς τὰς κύκλω κώμας καὶ τοὺς ἀγροὺς καταλύσωσιν καὶ εὐρωσιν ἐπισιτισμόν, ὅτι ὧδε ἐν ἐρήμῳ τόπω ἐσμέν.

atgaggandans þan du imma þai twalif qeþun du imma: fralet þo managein, ei galeiþandans in þos bisunjane haimos jah weihsa saljaina jah bugjaina sis matins, unte her in auþjamma stada sium.

3 Desiderata

は少ないと思われるが Lehmann のような詳細な研究論文のリストはあってもよかつたであろう。ただ、わが国と違って「語源」に関して、幸運なことにネガティブな呪縛のなかつた欧米では、毎年のように語源に関する論文が出ているので取捨選択が大変である。『英語語源辞典』は、巻末の「語源学解説」にあるようにラリンガル理論には「深入り」していないのだが、欧米の論文には非常に深入りしているものが少なくないのも困ったところである。参考までに主要な雑誌に最近発表された語源関係の論文を挙げると：

- Beeks, Robert S.P. 1998. “The Origin of Lat. *aqua*, and of **teutā* ‘people’”, *The Journal of Indo-European Studies*, Vol. 26, No. 3 & 4, 459-466.
- Blanc, Alain. 1999. “Étymologies homériques (1. *χαλίφρων* 2. *ἄκημος* 3. *ἀβληχρός*)”, *Bulletin de la Société Linguistique de Paris*, t. XCIV (1999), facs. 1, 317-338.
- Estell, Michael. 1999. “Orpheus and R̥bhu Revisited”, *The Journal of Indo-European Studies*, Vol. 27, No. 3 & 4, 327-333.
- Greppin, John A. 1999. “Gr. *κόστος*: A Fragrant Plant And Its Eastern Origin”, *The Journal of Indo-European Studies*, Vol. 27, No. 3 & 4, 395-408.
- Nassivera, Michele. 2000. “The Development of the PIE words for ‘sky’, ‘cow’ and ‘ship’ and the relative chronology of Osthoff’s law”, *Historische Sprachforschung*, 113, 57-70.
- Otto, Claude. 2000. “Zur Bedeutungsentwicklung der idg. Wurzel **bheudh-*”, *Historische Sprachforschung*, 113, 53-56.

Pinault, Georges-Jean. 2000. “Védique *dāmūnas*-, latin *dominus* et l’origine du suffixe de Hoffmann”, *Bulletin de la Société Linguistique de Paris*, t. XCV(2000), fasc. 1, 61-118.

というように、かなり基礎的な語彙もいまだに再検討が行われていることがわかる。

あとは、(De Vries の『古ノルド語語源辞典』にはないのだが) ほとんどすべての印欧語の語源辞典には、別巻ないし巻末に語族ごとの索引がついている。『英語語源辞典』にも印欧祖語の語根の索引があって、これは一目で同じ語源を持つ他の英単語がわかって便利である。これに加えて、本文で言及されているギリシャ・ラテン フランス語 ドイツ語 ロシア語 サンスクリットなど 主要な言語別の語彙索引があればそれぞれの個別言語の専門家にとって利便性が非常に高まるだろうと思われる。またこれは実現の可能性は低いかもかもしれないが Onions や Klein, Calvert Watkins など他の辞書を引用した部分はその典拠を明記した上で本文を英訳したならば、世界中でもっとも詳細かつ読みごたえのある語源辞典として喜ばれることは確実であろう。

註

(1)本稿は日本英文学会第73回大会シンポジウム第10部門「語源研究を考える」(司会 寺澤芳雄 討論者 風間喜代三 講師 飯嶋一泰、松村 剛、中村幸一)における著者の発表「印欧語から見た『英語語源辞典』」に加筆したものである。

(2)これは英語に限ったことではなく、古典ギリシャ語などではもっと著しいという。

(3)ちなみに *Le Petit Robert* では：

Son style, en grande partie tributaire du Corrège, s’inscrit dans le courant maniériste et révèle les influences de Rosso et D. de Volterra Baroccio anime l’espace avec une ampleur et une maîtrise qui annoncent l’art baroque; il a laissé des études au pastel et des dessins d’une facture sensible et nerveuse.

(4)縮刷版ではやや改訂されており、疑問符付きながら、最終的にサンスクリット起源となっはいる。しかし、疑問符の存在は大きい：Wartburg, Cortelazzo-Zolli

(1999²), Mayrhofer を完全に信頼していないという表明になるからである。

参考文献

- Bird, Norman. 1993. *The Roots and Non-Roots of Indo-European: A Lexicostatistical Survey*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Chantraine, Pierre. 1968-80. *Dictionnaire étymologique de la langue grecque*. Paris: Klincksieck.
- Черных П. Я. 1993. Историко-этимологический словарь современного русского языка: 13 560 слов. Москва: Издательство „Русский язык”.
- Cortelazzo, Manlio e Paolo Zolli. 1979-1988, 1999². *Dizionario etimologico della lingua italiana*. Bologna: Zanichelli.
- Devoto, Giacomo. 1968². *Avviamento alla etimologia italiana: dizionario etimologico*. Firenze: Felice Le Monnier.
- Ernout, Alfred et Antoine Meillet. 1967. *Dictionnaire étymologique de la langue latine. Histoire des mots*, quatrième édition. Paris: Klincksieck.
- Feist, Sigmund. 1909. *Etymologisches Wörterbuch der gotischen Sprache mit Einschluss des sog. Krimgotischen*. Halle: Max Niemeyer.
- Frisk, Hjalmar. 1960-72. *Griechisches etymologisches Wörterbuch*. Heidelberg: Carl Winter.
- 風間喜代三 1984. 「ギリシャ・ラテン起源の英語」『言語』第13巻 第7号 64-68.
- 風間喜代三 1987. 『ことばの生活誌：インド・ヨーロッパ文化の原像へ』平凡社.
- 風間喜代三 1997. 「印欧語の『肝臓』」『法政大学教養部「紀要」』第100号人文科学編、1-30.
- Klein, Ernest. 1966-67. *A Comprehensive Etymological Dictionary of the English Language*. Amsterdam: Elsevier.
- Kluge, Friedrich und Elmar Seebald. 1989²², 1995²³. *Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache*. Berlin: Walter de Gruyter.
- Lehmann, Winfred P. 1986. *A Gothic Etymological Dictionary Based on the Third Edition of Vergleichendes Wörterbuch der Gotischen Sprache by Sigmund Feist*. Leiden: E. J. Brill.
- Macdonell, A. A. and A. B. Keith. 1912. *Vedic Index of Names and Subjects*, 2 vols. Oxford: OUP.
- Mayrhofer, Manfred. 1956-80. *Kurzgefaßtes etymologisches Wörterbuch des Altindischen*. Heidelberg: Carl Winter.
- Onions, C. T. 1966. *The Oxford Dictionary of English Dictionary*. Oxford: OUP.
- Pokorny, Julius. 1959. *Indogermanisches etymologisches Wörterbuch*. Bern: Franke.
- Streitberg, Wilhelm. 2000⁷. *Die gotische Bibel: Der gotische Text und seine griechische Vorlage. Mit Einleitung, Lesarten und Quellennachweisen sowie den kleineren Denkmälern als Anhang. Mit einem Nachtrag von Piergiuseppe Scardigli*. Heidelberg:

Carl Winter.

寺澤芳雄（編）1997. 『英語語源辞典』研究社.

Vasmer, Max. 1976. *Russisches etymologisches Wörterbuch*. Heidelberg: Carl Winter.

Vries, Jan de. 1977³. *Altnordisches etymologisches Wörterbuch*. Leiden: Brill.

Walde, Alois und Johann B. Hofmann. 1938-54. *Lateinisches etymologisches Wörterbuch*. Heidelberg: Carl Winter.

Wartburg, Walter von. 1922-. *Französisches etymologisches Wörterbuch: eine Darstellung des galloromanischen Sprachschatzes*. Bonn: Schroeder, Klopp; Basel: Helbing & Lichtenhahn, Zbiden.

Whitney, W. D. 1905. *Atharva-Veda-Samhitā Translated into English with Critical and Exegetical Commentary by William Dwight Whitney, Revised and Edited by Charles Rockwell Lanman* (Harvard Oriental Series, vol. 7). Cambridge, Massachusetts: HUP.

（なかむら・こういち 政治経済学部助教授）